

木曽川

特集・美しい自然と歴史が調和する町・岐阜市

木曽川文庫は治水の資料館。
水の大切さや恐ろしさを歴史から学び、
これからの治水を、皆様とともに考えていきたいと思っています。
今回は、長良川によって育まれた
自然豊かな岐阜市の歴史と現状を特集。
また、今回から二回にわたって、輪中をご紹介します。



INDEX

ふるさとの街・探訪記《岐阜市》

▣歴史の変貌を繰り返してきた東海の古都

AREA REPORT

▣育もう、水と緑の豊かな郷土

面白WATCHING

▣やさしい風に誘われて、
美濃の国は春爛漫

歴史ドキュメント

▣輪中の成り立ちと輪中堤防

TALK & TALK

▣特異な地域社会を形成する輪中地帯

民話の小箱

▣おくわさまの哀しい伝説

歴史の変貌を繰り返してきた東海の小都

清流・長良川を抱き、濃尾平野の北部に広がる岐阜市。金華山に聳え立つ岐阜城や千二百有余年の伝統を誇る鵜飼など、数々の歴史ロマンがここには息づいています。その一方で、柳ヶ瀬や岐阜駅周辺のモダンなショッピングストリートは、現代都市の機能を発揮。自然・伝統・産業の調和した都市を目指して、より良い街づくりが推進されています。

歴史編

古代の息吹を伝える
美しき山と川の国。

岐阜市街



岐阜市は、日本のほぼ中央に位置し、長良川によって育まれた自然豊かな街です。その起源は先土器時代末期に遡り、古墳時代には、数多くの古墳が作られ、大和朝廷の影響が、すでにこの地にも及んでいたと考えられています。歴史の表面に美濃の国の人物が具体的に現われたのは、天武元年紀(672)に起こった壬申の乱。大海人皇子とその甥にあたる大友皇子の間に起こった主導権争いでした。大海人皇子側の勝因の一つには戦略的要点である、『不破之道』の確保が挙げられていますが、そこで活躍したのが地元である美濃の豪族や農民たち。彼らの功績は大きく認められ、乱の平定後にはそれぞれ官位や報奨を受けています。

美濃源氏の末流・土岐氏。

平安時代になると、美濃国の国守には多くの源氏姓が見られます。10世紀末から11世紀初期には、源為憲、源頼光の二人が続けて美濃の受領を勤めるなど、美濃源氏と呼ばれる勢力は、着々とこの地に地盤を固めていきました。その流れをくむ者の中でも、鎌倉幕府の成立後に目立って台頭してきたのが土岐氏です。承久三年(1221)に起こった承久の乱では、幕府方について勲功を上げ、幕府内での地位を確立。さらに建武の新政(1334~1336)で時の権力者となった足利尊氏に土岐頼貞が重用されて以来、戦国時代までの二百年以上に渡り、土岐氏は美濃国の守護として君臨することになったのです。

※当時、東山道と呼ばれた街道で、後の中山道、現在は国道21号となつてゐる。



ふるさとの街・探訪記

天下統一を美濃から

目指した戦国の武将たち

戦国の世、土岐氏に代わって美濃国の実権を握ったのは斎藤道三です。交通の要衝として、この地を重要視していた彼は、井之口村の稲葉山城を改築。その周りに形成された城下町は、現在の岐阜市の基礎となりました。道三の死後、永禄十年(1569)にこの地を治めた織田信長は、楽市楽座を奨励し、岐阜には多くの商人が集いました。江戸時代、岐阜が尾張藩お預け地となつてからは、城下町としての機能は薄れたものの、商工業の町として発展。その陰には、長良川の舟運を活用し、流通の中継地への転換に力を尽くした人々の努力があったのです。

21世紀を目指した都市づくり。

都市づくり。

明治22年(1889)市政が施行され、近代化を果たした岐阜市。第二次世界大戦では大きな被害を受けたものの、その後の復興には目覚ましいものがありました。高度経済成長期には繊維産業が飛躍的な伸びを



岐阜城



岐阜提灯



和傘づくり

伝統産業
和傘と提灯

岐阜市の伝統工芸品として、全国にも名高い和傘。その始まりは、江戸時代中期のことでした。戦後、洋傘の普及とともに日常品としての役割は薄れたものの、丁寧に作られた絵日傘や蛇の目傘は、通好みの高級品として現代でも高い評価を受けています。また卵型の火袋に、秋の七草など花鳥風月を描いた岐阜提灯も代表的な特産物。薄い紙に彩色された繊細な絵は、趣深い優美さを誇ります。これらの伝統工芸は、美濃紙や良質の竹を手に入れやすい地の利と、長年にわたって培われてきた伝統と匠の技の産物です。

律令国家の終焉を物語る

広野河事件

美濃国と尾張国の境となつてゐる大河山(現在の木曾川)は、古代においては、鵜沼川、墨俣川、尾張河とも呼ばれ、広野河もまた呼び名の一つでありました。

この大河山は、洪水によってしばしば流路を変えながら、濃尾平野を乱流していたため、河川の改修が必要でした。しかし改修工事は、対岸に大きな影響を与えることになるため美濃・尾張両国の論争がやまず、長年に渡って根本的な解決がされませんでした。

しかし、貞観7年(865)、尾張国では中央政府の裁定によって、広野河道を変更する工事が決定されました。ところが、翌年工事が完成すると、河流は美濃側に向かうこととなり、美濃国各務郡大領と厚見郡大領とに率いられた約700名の農民兵士が尾張側の工事現場を襲撃し、死者3名を含む死傷者を出しました。さらに、数日後、再度の襲撃によって、完成間近の河道を石・砂で埋めてしまい、100余騎を率いて、現場監視の状況が続きました。このような報告を受けた中央政府は、7月20日、尾張国司への工事の一時中止を指示しています。

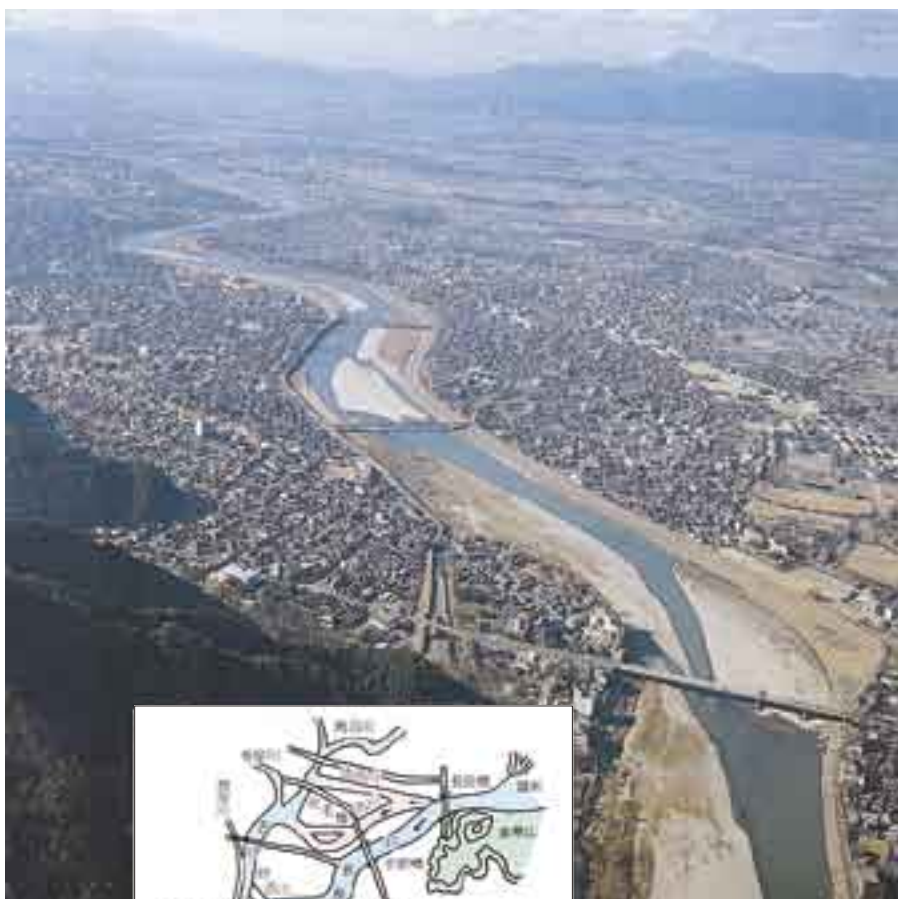
歴史上初めて記録された尾張と美濃の治水抗争は、この後史料には記されていません。「水を治める者は国を治める」のこゝろ通り、水争議は政情不安を象徴。この事件は当時の律令国家の様相を顕著に表わしています。国司の支配・統制を離脱した地方豪族の勢力の台頭―これは9世紀後半の律令国家の終焉の時を物語っているといえましよう。



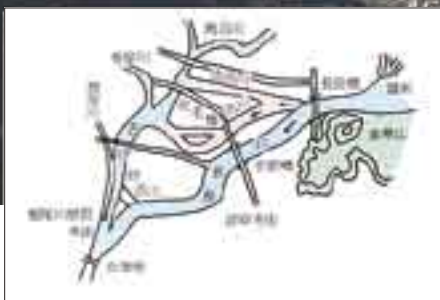
織田信長肖像

岐阜市は長良川中流域に位置し、
長良の清流に育くまれた風光明媚なこの地も
大雨のたびに洪水の危険にさらされていました。
この窮状を打開するため、
大正10年、国は大正改修に着手。
長良川の派川である古川・古古川の締切工事跡には、
人柱の形をした御影石の記念碑を建立し、
その歴史を後世に伝えています。

育もう、水と緑の 豊かな郷土



金華山山頂より長良川を望む



これからの治水

長良川(岐阜市) の治水事業

岐阜市を流れる一級河川「長良川」の改修は、大正10年から国の直轄事業として進められてきましたが、最近の洪水の実績や、流域の開発に即応するためにはまだまだ不十分です。

岐阜市の長良川における治水事業としては、とくに伊自良川の合流点である河渡・鏡島地区付近の川幅が狭いので、新しく堤防を作り川幅を広げる引堤事業を進めています。この事業により、川幅が約100メートル広くなり、洪水に対する安全性が向上します。



金華橋下流
ラブリバー
制度



雄総地区高水敷の整備



河渡地先引堤

20箇年に渡って実施された 木曾川上流改修

明治20年に着工された近代治水事業によって、木曾三川の完全分流が成し遂げられ、大きな効果をあげた下流改修区域に比べ、上流に属する部分は、狭い河幅、多くの屈折部、弱小な堤防のため依然洪水の脅威を受けていました。

このような状態を打開するため、大正10年に木曾川上流改修を策定。大正改修と呼ばれるこの事業は、大正12年、揖斐川・呂久の新川付替工事、翌年長良川・西小藪の旧川締切りと木曾川・川島の河身整理など、木曾・長良・揖斐の上流区域で、遂次着工されました。

古川・古古川の 締切工事

長良川の流路は、長良橋の下流で3つに分かれていましたが、一度大雨が降れば、早田・則武間の長良古川や、鷲山・則武間の長良古古川にも水が溢れ、大きな災害を引き起こす原因となっていました。



締切堤の上に建つ改修記念碑

昭和8年、長良川の分派川である古川・古古川の締切工事に着工。古川・古古川を分派口で締切るとともに、それより下流の長良川本川の川幅を広げるため、長良川右岸江口より上流福光に至る延長5,600mの新堤を築きました。
川幅は忠節橋のところで、もと173mあったのが、266mに広げられ、流路は整備されました。掘削は人力のほか、ラダーエキスカベーターという掘削機械が使われ、掘削された土砂のほとんどは、築堤に利用されました。
昭和14年に工事が完成すると、岐阜市北部一帯は水害の脅威から開放されるとともに、約160町歩の広大な河川敷が宅地や耕地に利用され、現在は総合運動場、学校、県営市営住宅が立ち並び、岐阜市発展の一翼を担っています。締切堤中央部には記念碑が建立され、上流改修の歴史を今に伝えています。



ラダーエキスカベーター

街のランドマーク 水位表示塔

大いなる流れ―長良川。それは、大地に実りをもたらし、モノを運び、文化を生み、人々の暮らしと密接に関わり続けてきました。長良川が流れる岐阜市の歴史は、過去、現在、未来において、まさに川とともに歩む歴史でもあるのです。川はいつも穏やかな表情をしているとは限りません。市街地の大部分が川の水位よりも低い場所に位置する岐阜市では、洪水によりいったん堤防が切れると大災害になると予想されます。そこで、水防に対する市民の関心を高めるために設置されているのが水位表示塔です。この塔は、現在の長良橋地点の水位を一目で確かめられる、言わば「川の信号機」です。中でも、金公園とマース21に設置された水位表示塔は、センターポールに水位を50cm毎に電光表示するもの。堤防の高さや出水水位、警戒水位と照らし合わせて、現在の水位の状態を誰でも簡単に知ることができます。また、ファッションの街・岐阜にふさわしい近代的なデザインは、街の景観とも調和。長良川をより身近に感じさせてくれます。



金公園の水位表示灯



長良川の出水 (S51.9)



長良川夕景

やさしい風に誘われて
美濃の国は春爛漫。

やわらかな春風が川面をそつと撫でる頃、
美濃の里には、パステルカラーのヴェールが舞い降ります。
緑をいつそう鮮やかに薫らせる金華山、
歴史とともにゆつくりと流れる長良川。
自然とのふれあいは、やさしさを心に運ぶ魔法の宅急便。
街の鼓動を感じることができたなら、
探してたサムシングに、きっと巡り逢えるはず。
物語のプロログが、今始まります。

レジャーゾーン

1 金華山ロープウェイ

昭和30年に開通したロープウェイは、全長約600m。岐阜公園から標高329mの金華山山頂までを約3分で結んでいます。山頂には、展望台やリス村、そして岐阜城。その天守閣からは、道三や信長ものぞんだ岐阜市の全景が、360度の大パノラマで見渡せます。

2 名水広場

春は花見、夏は夕涼みと、四季折々の表情が楽しめる憩いの場所。長良川のせせらぎを聞きながら、のんびりとした休日をご過ごすにはぴったりです。

3 長良川温泉と屋形船

リウマチや皮膚病にも効果がある単純炭酸鉄泉は、心と身体を心地よくリラックスさせてくれます。また金華山の麓、長良川畔に沿ってたち並ぶ温泉街からは、屋形船に乗るにも便利。夏の鵜飼はもちろん、冬には雪景色、春には桜と、風流な船に揺られて見る景色は趣もたつぷり。川面と岸辺の織りなす季節のハーモニーを堪能できます。

カルチャーゾーン

1 日本一のカゴ大仏

岐阜公園の隣、正法寺の岐阜大仏は、高さ13・7mの日本一の乾漆仏。骨格は木材、外部は竹と粘土で造られ、その上に経典を貼込み、漆と金箔を塗り重ねた世界でも珍しいものです。胎内には薬師如来が納められています。

3 名和昆虫博物館

明治29年名和靖氏が創立した昆虫研究所が、大正8年、名和清氏によって日本で唯一の昆虫博物館として開館。世界中から集められた昆虫の種類総数は、なんと1万2千種、標本数は30万以上というから驚きです。

4 長良川の鵜飼

鵜飼の歴史は古く1,200年以上の歴史を遡ります。信長や家康ら、時の権力者たちにも愛され、守り続けられてきた昔ながらの漁法は、今や世界的にも有名な伝統芸能。かがり火の中、鵜匠のたくみな手綱さばきによって、鵜が次々と鮎を捕らえる様子は、芸術とさえ言われています。

岐阜市を彩る季節の祭り

■ 手力の火まつり(手力雄神社)

—4月5日—

手力の火まつりは、天下の奇祭。20m級の竹ざおに火薬をいれた“御幣行灯”、火の滝が夜を



彩る“火爆”、ダシ山にあらゆる花火を仕掛け一気に爆発させる“山焼”など、ダイナミックな花火と轟く爆音は勇壮そのものです。

■ 岐阜まつり・道三まつり(岐阜市一円)

—4月4日・5日—

4月4日・5日の両日は、伊奈波神社、金神社をはじめとする市内神社の例祭・岐阜まつり、斎藤道三の遺徳をたたえる道三まつりが、一斉に開催されます。市内には、満開の桜の中をにぎやかなパレードやみこしが行き交い、みこしコンクールや野点なども行われます。

■ 岐阜ファッションフェア

—6月上旬—

全国でも有数のアパレル産地・岐阜。芸術とファッションの街、イタリアのフィレンツェとも姉妹都市盟約を結び、全国のアパレル業界から熱い注目を浴びています。その期待に応えるべく開催されるのが『岐阜ファッションフェア』。華やかなショーや展示会を通して、新しいファッション文化を発信しています。



華やかなショーや展示会を通して、新しいファッション文化を発信しています。

歴史博物館



2 歴史博物館

原始から現代にかけての岐阜に関する資料や展示物を一堂に紹介。学習室や図書室もあり、様々な利用ができる博物館です。豊富な展示物は、遺跡からの出土品や美術工芸品、鵜飼舟の再現など、どれも貴重なものばかり。長良川とともに暮らした人々の生活と歴史に触れることができます。



カゴ大仏



名和昆虫博物館



金華山ロープウェイ



名水広場



長良川の鵜飼



長良川の屋形船



主・な・観・光・行・事		
行事	期日	場所
ぎふ梅祭り	2月下旬~3月上旬	梅林公園(市内梅林南町)
美江寺まつり	3月1日	美江寺観音(市内美江寺)
岐阜まつり	4月4・5日	全市
道三まつり		
手力の火まつり	4月5日	手力雄神社(市内長森蔵前)
長良川鵜飼びらき	5月11日	長良川畔
長良川まつり	7月16日	長良川畔一帯
あかりフェスタ	7月下旬	市内中心地
全国選抜中日花火大会	7月最終土曜日	長良川畔
長良川全国花火大会	8月第1土曜日	長良川畔
長良川薪能	7月下旬	長良川畔
提灯まつり	7月中旬~8月中旬	市内中心地
ぎふ長良川夏まつり	8月上旬	長良川畔
信長まつり	10月第1土・日曜日	全市
長良川鵜飼じまい	10月15日	長良川畔
池の上みそぎまつり	12月10日	葛懸神社(市内島池の上)

輪中の成り立ちと輪中堤防

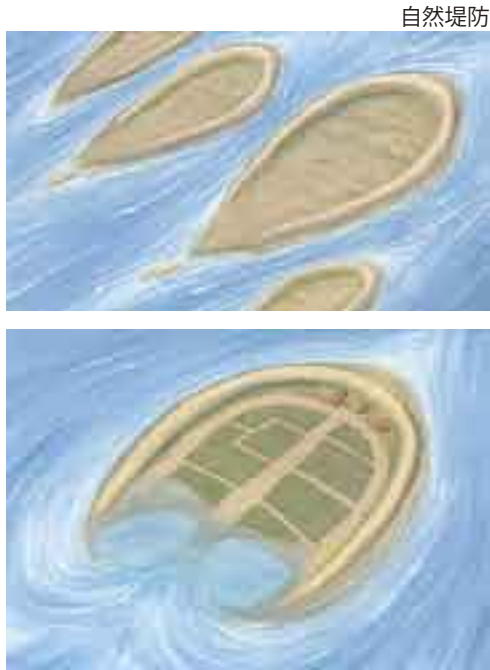
川の流れと長い歳月が作り上げた輪中。
そこに刻みこまれたのは、水と人との闘いの歴史。
洪水によつて、多くの尊い命が奪われたこともありまし
た。しかしそれは同時に、輪中独自の気質や文化をも生み出していったのです。
水屋建築、上げ舟、助命壇などは、輪中に暮らした先人たちの知恵の産物。
そこで今回から2回にかけて輪中を特集し、
その形態や暮らしを紹介します。



潮除堤

輪中の成り立ちとその形態

輪中は、濃尾平野西部の下流域であるデ
ルタ地帯に数多く形成されていますが、原
形は曲輪とよばれるもの。木曾三川の合流
する低湿地帯では、昔から洪水の度に一面
が海のようになり、次第に山からの土砂が
ふだんの河岸の付近にたまり、細長い微高
地を作りました。このわずかに高い自然堤



自然堤防

尻無堤

防の上に、人々は居住し、まわりの低湿地
を利用して稲作を行なっていました。自
然堤防だけでは、洪水から村を守ることは
できません。そこで人々は、洪水時の水の
直接の攻撃を防ぐために、自然堤防をつな
いで、上流側に半円形の堤防を築きました。
この堤防が曲輪と呼ばれるもので、下流が
尻無しであつたため尻無堤、あるいは築捨
と呼ばれていました。

尻無堤は中世から近世にかけて形成され
ましたが、海水の逆流による塩害を防ぐこ
とはできません。そこで、尻無しの部分に
潮除堤と呼ばれる堤防を築きました。この
ように、周囲がすべて囲まれることになつた
懸廻堤によって、本格的な輪中が形成され
ました。

江戸時代に入ると、新田開発が進む一方、
小輪中の堤防をつなぎ、いくつかの輪中を複
合した大規模な輪中が形成されました。

またこの頃、輪中内の人々による水防共
同体も組織され、輪中地域独自の水防意識
や気風も作り出されました。

輪中の住居

①水屋建築

輪中地域の代表的な景観の一つ
に、高く土盛りしたり、石積みし
たりした上に建てられた『水屋』
があります。水屋建築は、水災時
に生命や財産などを守るための建
て物で、母屋よりもさらに高いと
ころに作られ、石垣の高さは1m
〜4m近いものまであります。水屋は、そ
の形や用途から、土蔵式水屋、倉庫式水屋、
住居倉庫式水屋などに分けられますが、堤
防が切れて水が入ってから引くまでの間、
家族がそこで生活できるよう、味噌や米、
水など、生活必需品が常時貯蔵され、また
長持や箆笥などが収められていました。



らいで、米なら10
俵から14俵ぐらい
積めるもの。普通
の農家では田舟な
どの舟を所有し避
難用として使った
といわれ、上げ舟
を持つのは地主や
中農以上の農家で
した。

②上げ舟

母屋や水屋の軒などに舟を吊るして避難
に備えたり、庭に高い木を植えて舟をつな
ぐことができるようにしています。舟の大
きさは3間から3間半、幅3尺から4尺ぐ



盛り土をした家



助命壇



水屋

③助命壇

水屋をもたない農民たちの洪水時の避難
場所を『助命壇』あるいは『命塚』と呼ん
でいます。村や地区によつては、協同で土
盛りをして高台を作り、高い木を植えて、
水が引くまで高い木にのぼり、救いを待ち
ました。また、輪中内の神社は高く盛り土
してあることが多いのですが、これも助命
壇の役割をしていたそうです。

④屋敷森

屋敷の周囲に巡らされた屋敷森は、防風
林としての機能のほかに、防水林としての
機能をもち、流木や風波などを防ぐ役目の
ほかに、『舟つなぎの木』として一時的な
救助の役目を果たしています。屋敷森の樹
種は、マキ・エノキ・スギなどですが、堤
防治いは竹林もみられます。

⑤上げ仏壇

浄土真宗が盛んな輪中地域では、いざ洪
水、浸水という時に備えて、仏壇にも工夫
が見られます。洪水時に滑車を使って2階
へ引き上げる仕組みになった上げ仏壇がそ
れで、篤い信仰がこうした工夫を生み出し
ました。

中山道の名残を今に伝える 『お紅の渡し』

岐阜市の発展は、中山道、そして長
良川の舟運の二大流通経路をなくして
は語れません。中でも河渡宿は、中山
道の宿場町でもあり、河湊でもあつた交
通の要所。文久元年（1861）の和宮江
戸降嫁の際にも、この渡し舟が利用さ
れています。

中山道河渡宿とともに約300年前から
始まった『お紅の渡し』は、中山道の脇
道として栄えていました。

明治中期には輪中地帯の渡船場は約
70を数えましたが、鉄道や道路の普及
によつて渡し船は次第に衰退。現在で
は、木曾三川あわせても8カ所を残す
のみとなっています。『お紅の渡し』は、
現在でも続いている数少ない渡船場の一
つです。れっきとした県道で、渡船料は
無料（月曜
定休）。日本
厄除け三弘法
の一つである
乙津寺が近く
にあることか
ら、毎月21日
の『鏡島弘法
の日』には、
多くの参拝者
に利用されています。



BOOK LAND

小説『乱流』が 発刊されました

今日の木曾三川の基礎となったオラ
ンダ人技師ヨハネス・デレーケの計画
による木曾三川分流工事「明治改修」
が小説として登場しました。著者は第
7回日本文芸大賞女流文学賞を受賞さ
れた三宅雅子先生で、デレーケの明治
6年の来日から同36年の帰国までの約
30年間にわたる歩みを、濃尾大震災や
度重なる水害などの時代背景とともに
とらえた重厚な大河小説としてまとめ
られています。



特異な地域社会を形成する輪中地帯

濃尾平野の河口域に形成されている輪中。
洪水を防御するため、堤防を周囲に廻らせた囲堤集落は、独自の水防組織と共同体を形成し、その特異な形態は、世界でも類をみることがありません。
今回は、伊藤安男先生に輪中の形態と分布状態を語って頂きました。



花園大学文学部教授
伊藤 安男 先生

洪水への対応として形成された輪中は、
囲堤集落の典型です。

輪中が囲堤形態の治水工法であることは、輪中という呼称、あるいは輪之内とか曲輪とか称されていることからわかります。すでに江戸時代の宝暦治水の普請覚書（一七五四・宝暦四年）に、「一、此度御



輪中分布図

普請之儀ハ都々輪中と申、… 囲つつ川中二堤を築廻し、民家田畑等有之」と輪中が囲堤集落であり、特異な地方であることを記しています。

現在の小学校の社会科四年生の教科書の『低地のくらし』の単元では輪中が教材として扱われていますが、それらの教科書の記述のすべてに共通するのは、「… といばうにかこまれた田畑や家…」であります。また河川工学ではその定義づけとして「ある特定区域を洪水から防御するために、その周囲をめぐらした堤防」としています。

この輪中のような囲堤形態は、ある特定の区域を洪水から防御する上にきわめて有効であり、また一貫した洪水策を必要としないため連続堤以前の治水工法として、江戸時代には洪水多発の河川地域の特定の地方に施行されました。例えば利根川、大井川、櫛田川、吉野川、大野川、信濃川、九頭竜川、円山川などの中流域に。また中国の長江、珠江、台湾の塩水溪。熱帯アジア

生活基盤をもつ同質空間としての地域。すなわち輪中地域を形成している例は、世界でもこの地方のみです。

このように特異な地域として、洪水と人間との相剋の歴史の集積した輪中地域も大きく変容しようとしています。それは治水事業の進行や土地改良事業による輪中近代化であり、ある面では都市化でもありました。しかし現実の輪中近代化は非輪中化でもありました。新しい災害を招かないよう、地域の特性を考慮したプロジェクトにしていけることが必要でしょう。

伊藤安男（いとうやすお）

花園大学文学部史学科教授、日本地理学会評議員、岐阜地理学会会長及び岐阜県郷土資料研究評議会会長。輪中研究にて岐阜県芸術文化奨励賞受賞。主なる著書「輪中」「長良川を歩く」「岐阜県地理あるき」など。

主なる論文「輪中の災害と治水」「輪中の水論」「蘭人技師アレーケと砂防」「明治前期の治水思想」「木曾川改修工事とその前史」など。



のプラマプトラ、チャオプラヤ、ソンコイの各川にも見られ、低湿地を開田する稲作民族に共通するものと言えるでしょう。

このように各地に見られる囲堤は、それぞれ囲土手、囲縄手、囲い、基囲（中国）、囲堤（台湾）などと称していますが「輪中」という用語は慣用されていません。

その点において木曾三川流域の場合、約八〇の囲堤の輪中が分布し、それぞれの輪中が各々の水防組織をもつ共同体を形成し、堀田型の土地利用を行ない、水屋建築をもつなど、洪水への対応としての共通の生活基盤をもちながら特異な地域を形成しています。



古地図にみられる輪中の分布



空中写真にみられる大垣輪中の輪中堤

木曾川文庫だより

木曾川文庫・この程リフレッシュオープン

昭和62年に設立された木曾川文庫は、周辺が明治改修の生きた史蹟や桜の名所・河川公園という環境に恵まれ、平成4年には月平均420人もの人々が訪れています。現在、書籍は1,400点、宝暦治水、明治改修に関わる展示

物等もますます充実。そしてこの度、その空間をさらに活かし魅力アップするため、書架、閲覧、展示の各コーナーを改装しました。木曾川文庫に、より親しみ、学び、活用していただくよう、来館をお待ちしております。

桜のような短い命 おくわさまの哀しい伝説

岐阜市

昔、昔、まれに見ぬ大雨の年のことでした。激しい雨は、長良川を恐ろしいほどに荒れ狂わせ、ついに堤防が破れてしまいました。長良の村々は、あつという間に、多くの家や田畑、そして尊い人の命までもが濁流に呑み込まれていったのです。多くのものを失った村人達は、なす術もなくただ途方に暮れるばかり。

そんなとき、この村を一人の不思議な旅人が通り掛かりました。村人の悲しみを見兼ねた旅人は、『今度、堤防を築くときは、村で一番美しい娘を人柱にお立てなさい。そうすれば、堤防が切れることはなくなるでしょう』と言いついて立ち去ったのです。

はじめは『そんなかわいそうなことはできない』といっていた村人たちでしたが、ほかに良い策もなく、ついに人柱を立てることが決められたのです。

ちょうど村には、村一番の器量良しと評判の娘がおりました。若く、美しいその娘の名は『おくわ』。村人達は断腸の思いで、おくわに人柱になってくれることを願ひ上げました。突然のことに、両親は嘆き悲しみ、おくわも泣き暮らす毎日が続きました。悩みあぐねたおくわは、ついに決心したのです。『私が人柱になることで、多くの人の命とこの村が助かるのなら、喜んで人柱になりましょう』おくわは、静かに、きっぱりとこう言いました。

こうして、深い哀しみの中、新しい堤防が築かれたのです。その後、旅人の言葉どおり、二度と堤防が切れることはなかったということです。

この堤防は、長良橋の上流500m南側にある『さくらづつみ』。現在では、リバーフロントとして市民の憩い場となっています。

桜前線がやってくる頃、この堤防には多くの花見見物の人々が訪れます。花びらを淡いピンクに染め、その短い命を惜しむことなく数週間で潔く散らす桜。その花言葉は『純潔』です。『さくらづつみ』の桜は、これからも毎年きれいな花を咲かせることでしょう。まるで、おくわの清く、美しい心の気高さを象徴するかのようです。



●木曽川文庫利用案内●



【開館時間】 午前9時～午後4時30分
 【休館日】 毎週月曜日・祝祭日・年末年始
 【入館料】 無料
 【交通機関】 国道1号線尾張大橋から車で約10分
 名神羽島ICから車で約30分
 東名阪長島ICから車で約10分

【お問い合わせ】
 船頭平閘門管理所・
 木曽川文庫
 〒496 愛知県海部郡
 立田村福原
 TEL(0567)24-6233



— 編 集 後 記 —

いよいよ春もたけなわ、行楽シーズンの開幕です。船頭平閘門の周りにも、4月は桜、5月はツツジが咲き誇り、人々の心に安らぎを運んでくれます。今回の12ページ、オールカラーにボリュームアップした『KISSO VOL.6』いかがでしょうか。歴史ドキュメントのコーナーでは、今回から2回にわたって輪中を特集。今後もさまざまなテーマをとりあげていきたいと思いますので、皆様がらのご意見やご要望をぜひお聞かせ下さい。編集にあたっては、岐阜市役所の皆様に大変お世話になり、ありがとうございます。次回は木祖村を特集します。ご期待下さい。

表紙写真 左：金華山の桜
 右上：長良川の鵜飼
 右下：長良川中流風景